三島市　（通巻　134号）

郷土資料館だより

Vol.45 No. 3
2023.3.15

企画展「三島ゆかりの文化人たち」開催中

●会　　期　令和５年２月11日(土祝)～５月28日(日)
●会　　場　郷土資料館　１階企画展示室

戦乱の世が終わり、安定した時代になった江戸時代は、一般庶民にもさまざまな文化が波及した時代です。当時の庶民に親しまれたもののひとつが、俳句のもととなった「俳諧（はいかい）」です。

俳諧とは、もとは「滑稽」を意味する言葉で、和歌を長くつなげて詠んでいく「連歌」から派生した文芸です。連歌のうち、滑稽さやおかしみのあるものを「俳諧之連歌（はいかいのれんが）」と呼ぶようになりました。その後江戸時代にはいり、庶民にも広がるにつれ、「俳諧」とよばれるようになりました。

また、連歌はもともと百句（百韻（いん））や千句など、とても長くつなげていくのが一般的でした。俳諧（俳諧之連歌）も江戸時代のはじめごろまでは同様でしたが、次第に短いものが好まれるようになり、元禄頃には36句の「歌仙（かせん）」が一般的になります。俳諧の最初の「五・七・五」を「発句（ほっく）」といいます。そこに脇句（わきく）（第二句）、第三句、とつけていきますが、次第に発句だけでも独立して鑑賞されるようになっていきました。この「五・七・五」を文芸として確立し、「俳句」と名付けたのは明治時代の正岡子規です。

今回の企画展では、江戸時代から明治時代にかけて三島周辺で活躍した俳人たちとその作品（俳諧）を中心に、地域で活躍した文化人たちの作品をご紹介します。

江戸時代に活躍した三島ゆかりの俳人の一人が、三島市玉沢にある妙法華寺の四十一世住職をつとめた川原一瓢（いっぴょう）です。妙法華寺に赴任する以前は江戸・本行寺（ほんぎょうじ）の住職をつとめており、そのころから俳諧活動を行うようになりました。江戸在住時、一瓢が親しくしていた俳人が、小林一茶（いっさ）です。江戸で出会った二人ですが、一茶は信濃へ帰郷したのちも江戸へ出る時には一瓢の本行寺に宿泊するなど、長く交友関係にありました。

▲川原一瓢・小林一茶　俳画（掛軸）
（関守敏 氏　所蔵）

今回展示する資料のひとつは、一瓢の絵画と一茶の句からなる掛軸（右写真）です。右端の「玉山人」が一瓢の号です。一瓢の描いた犬は、うつむいて元気がないように見えます。そこに添えられた一茶の句「けふ（きょう）からは薬降るべし　神迎（かみむかえ）」は、弱った犬をなぐさめる内容でしょうか。

この作品は、いつごろ作られたものなのでしょうか。注目したいのは「玉山人」の文字です。一瓢は、文化14年（1817）、江戸の本行寺から現在の三島市玉沢にある妙法華寺へ移住しています。「玉山人」の「玉」は玉沢の意味であるとされ、この号を名のるのは伊豆移住後であろうと考えられています（注１）。ではこの作品は一瓢の伊豆移住後のものと考えたくなりますが、一瓢と一茶との交流は、一瓢の伊豆移住後には「殆ど絶えている」（注２）とされているのです。もしこの作品が一瓢の伊豆移住後に作られたものであれば、その時期の両者の交流を示す、貴重な作品かもしれません。

（注１）南信一著『俳僧一瓢の研究』（風間書房、昭和51年）３頁、（注２）同18～19頁

三島の歴史とジオポイント・26

――白滝公園――

湧水と欅（けやき）林と溶岩からなる白滝公園（一番町1-1）は、四季を通して三島市民の憩いの場です。

約１万４千年前（最終氷期末）の当地は、光ヶ丘団地方面から楽寿園・小浜池に伸びる箱根の山脚上にあり、西側には深さ約100ｍの谷を挟み、愛鷹の山脚が迫っていました。

約１万年前、富士山から流出した三島溶岩流が谷を埋めつくし、箱根の山脚に遮られ滞留し、当地の東側に急崖を作りました。公園東側の市立図書館では、地下約30ｍに溶岩が存在します。

小型溶岩塚と左奥に水神社

当時の菰池周辺の溶岩崖からは、「白糸の滝」のように地下水が湧出していたでしょう。

溶岩流末端の表層は局所的に盛り上がり、「愛染院跡の溶岩塚」など多数の溶岩塚が出来ました。公園入口の小溶岩塚（三島市天然記念物）で、その成因を理解できます。

約2900年前、富士山東斜面が大崩壊し、巨大土石流「御殿場泥流」が三島市街地を覆いました。当地も泥流層に覆われたようで、園内の各所に御殿場泥流起源の大石が散在しています。

その後、溶岩流末端からの湧水が泥流層を浸食し、菰池低地を作りました。

江戸時代後期の当地は、三嶋大社の護摩堂を支配する愛染院の寺域でした。園内の滑り台東側に白滝観音堂があり、当時の観音碑とされる三島溶岩製石碑が、現在の観音堂（昭和25年新築）の脇にあります。長らく水没していたため角が取れています。また、園内のトイレ付近には、宝勝院（法正院）がありました。

野戦重砲連隊の水源井戸と水神社

江戸時代から昭和初期の当地には、各所に水車小屋がありました。現在でも南側の湧水池には水車が池底の砂を巻き上げるのを防ぐコンクリート製の板が残っています。

約100年前の大正８（1919）年に、三島駅北側一帯に帝国陸軍第３師団・第1旅団野戦重砲連隊が進出し、その水源地として当地の湧水が利用されました。現在の水遊び場に井戸が３本掘られ、その管理も兼ねて現商工会議所付近に憲兵隊が置かれました。井戸跡近くには「陸軍用地」の石碑が残っています。

軍隊の進出により、公園西側の道路は拡幅され、通称「旅団通り」と呼ばれました。

江戸時代、当地に３宇の祠が記されていますが、具体的な位置は不明です。現在は2宇の祠があり、共に水神を祀ります。園中央の水神は竜王を祀り、木製祠の中に石製の社殿があります。朱を塗られたデイサイト質製です。江戸時代のものかもしれません。

水遊び場西側の水神は弁財天を祀ります。祠はカワゴ平パミス（約3200年前の噴出物）製です。昭和３～40年代に造られたものでしょう。

公園南口にある三島名物「農兵節の石碑」は、宮城県産の通称「仙台石」と呼ばれる粘板岩製で、２億数千万年前、日本列島が大陸の縁辺にあった頃に堆積したものです。

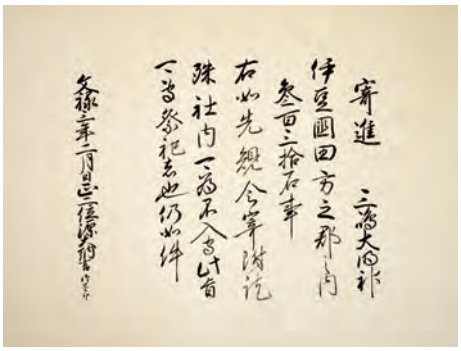
公園の説明は尽きません。地名の由来や湧水機構などについては、後日紹介します。

（三島市郷土資料館運営協議会委員・増島淳）

三嶋大社の古文書をよむ　第17回

◆徳川家康の寄進状と歴代将軍の領知文書

寄進状の内容　令和５年のNHK大河ドラマの主人公、徳川家康の古文書を紹介しましょう。戦国時代の終わり、豊臣政権期の家康の文書です。天下統一を目指す豊臣秀吉は、天正18年（1590）７月に戦国大名の北条氏を滅ぼしました（鎌倉時代の北条氏と区別するため後北条氏とも呼びます）。北条氏は、小田原城を中心に関東から伊豆にかけて大領国を築いていたため、広大な領域が豊臣政権の支配下となりました。秀吉は新たな支配地の大半を徳川家康に与えます。江戸を新たな拠点とした家康は、新領地で検地を実施し、地域の領有関係を整理していきます。伊豆では江戸移封直後から検地が実施され、その数値をもとに三嶋大社の土地領有が確認されています。その確認書といえるのが、この**文禄３年（1594年）２月の徳川家康寄進状（徳川家康黒印状）**です。家康の署名である「正二位源大納言」の下に「御墨印」と書かれています。これは実際には家康の墨印＝黒印が捺されていたという意味です。ですからこの文書は正文ではなく**写文書**です。



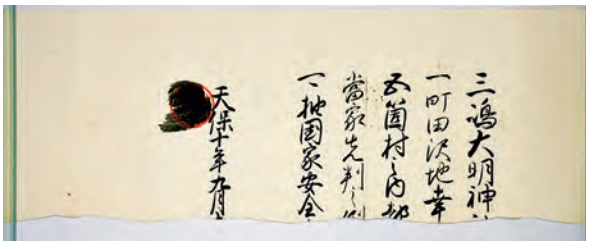
▲写真①文禄3年（1594）2月日付
徳川家康寄進状写

▼書き下し文

寄進　三嶋大明神
伊豆国田方之郡之内
参百三拾石事
右、先規の如く、寄附せしめおわんぬ。殊に社内不入たるべし。此の旨を守り、祭祀を専らにすべきものなり。仍って件の如し。
文禄三年二月日　正二位源大納言御墨印

寄進という言葉を用いていますが、「先規の如く」の文言がありますから、この330石の領地は、三嶋大社領をこれまで通り安堵（本来所持している所領を認めること）したものといってよいでしょう。以後、徳川将軍の代が変わると、将軍の署名が無く朱印が捺された文書による社領安堵がなされますが、その文書を領知朱印状と呼んでいます。またこの領知朱印状による、将軍の代替わりごとの所領確認を継目安堵といいました。なお、10年後の慶長９年（1604）には200石が加増され、大社領は530石となりますが、これが江戸時代を通しての三嶋大社の所領石高となります。

写しか残っていない領知朱印状のこと　家康の時代は三嶋大社宛のような黒印の他、朱印や花押による文書もあり、統一性に欠けるのですが、やがて一般寺社については将軍家朱印に一本化されます。三嶋大社の場合、２代秀忠以降は朱印状によって社領の確認がなされています。ただ、大社の領知朱印状は、第12代家慶・14代家茂については正文が残りますが、あとは写のみです（６代家宣・７代家継・15代慶喜は在任期間が短く、領知朱印状未発布。13代家定の朱印状は、三嶋大社には正文･写とも残っていません）。残った２通の正文も、朱印を墨で塗り消したうえ、刃物によって上下に切断し下半分がない不完全なもの（写真②参照）。大切な文書なのになぜこんなことを？



▲写真②［参考］天保10年（1839）9月（11日）付
徳川家慶朱印状
切断され下半分が無い将軍家朱印状。
朱印も墨消されている。

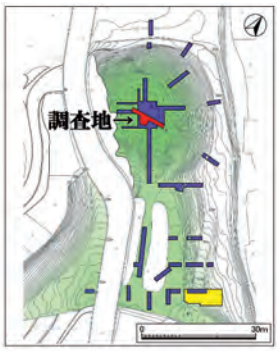
この墨消しと切断は明治新政府のもとで行われたものとみられます。新政府は、慶応４年（1868）閏４月19日付けの太政官達によって、旧幕府より受けた領知書類を差し出すよう、寺社のみならず公家・武家全般に命じています。これに基づき徳川将軍家が発給した多数の領知朱印状類が接収されました。地域によっては不徹底により、朱印状を残す寺社がありますし、運良く文書が返還された例もありますが、多くの寺社では提出したまま、戻ってくることはありませんでした。

差し出し後の領知朱印状は、一部は現存し、様々な場所で保管されています。ただし三嶋大社の文書と同じく、朱印などが墨で塗り消されたもの、切断されたものも多くあります。大社の２通の正文がどの様に戻ったのかは不明ですが、静岡県下では、第３代静岡県令および初代静岡県知事となった関口隆吉が県内寺社の朱印状群を譲り受け、明治20年（1887）６月に久能山東照宮に573通、静岡浅間神社に73通を奉納したと伝えます。こうした移動に関わりがあるかはわかりませんが、貴重な文書の破棄･流出を残念に思う人たちが介在した可能性はありそうです。他に、埼玉県にある氷川神社の神職西角井家が明治時代に古道具店より入手した千数百もの将軍家朱印文書群（廃棄・流出文書）のうちに、２代秀忠・３代家光の三嶋大明神宛領知朱印状が含まれることがわかっています。丁寧に捜索すれば、不明となった大社宛朱印状の正文がまだ見つかるかも知れません。

（三島市郷土資料館運営協議会委員・奥村徹也／三嶋大社宝物館 学芸員）

向山古墳群 第16号墳　第２回

――墓壙の竪穴式石槨――

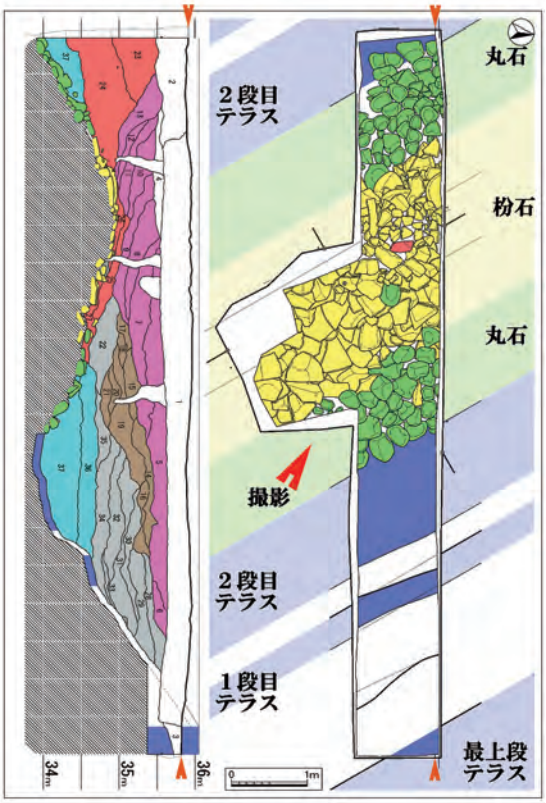


前回記述した「向山古墳群第16号墳 第１回」の続きになりますので、所在地や時代/時期などの説明は前133号をお手元においてお読みください。

さて、向山16号墳の後円頂部の下には亡くなった方が葬られた墓室が存在し、３段に掘削された竪穴に石積みが設置されています。写真は中心部に綺麗な弧を描く（黄矢印）石の高まりがあって、これが「**石槨**」、右側の垂直の壁（白矢印）が土の堆積状況を観察する断面となります。下の図左側は「**断面図**」に順序だてて埋めた土（層）の状況を示すもの、右側はそれに位置関係を合わせて真上から見た「**平面図**」になります。図は線で表現しますので理解することが少し難しく感じますが、考古学の話を理解するためには図面を読み解くことが必須の条件となりますので、それぞれの範囲を色分けして簡潔に説明します。どうぞお付き合い下さい。

竪穴式石槨の検出状況

Ⓐ　平面図について黄色と緑色の範囲ですが、２種類の形状の違う石が使い分けられています。黄色は石槨の中軸中央部に伸び、厚さ10㎝程度に薄く割られた平たい石材で「**枌石**」と呼ばれる集まりです。一方緑色は黄色を囲むように位置し、人の頭ほどの「**丸石**」が使用されています。丸石は石槨の周りを支える土台となり、現在の「コンクリートブロック」の役割です。枌石は墓室の壁や天井を化粧細工するもので、「レンガ」の役割を果たしています。平面図の青色と白色は、後円部の盛土を掘削し、石槨を設置するための地面への凹み穴です。青色は段となり人が作業できる「**テラス**」で、白色は穴を深くする傾斜面です。当然発掘の及ばなかった黄色枌石の下にも３段目の穴底である平坦面が確実に存在します。



石槨の断面図と平面図（1/100）

Ⓑ　次に断面の色分けです。断面は平面図橙色の矢印～矢印までの壁面を垂直に測ったものです。層は全体で37枚に分けられ、石槨作成の工程に合せ、順序だてて埋めた状況が５つのグループに分けられました。水色は石槨土台まで一気に埋めて作業領域となる平坦面を大きく拡大した層です。棺を埋設する作業や儀式が行われたのではないかと思われます。次に赤色は石槨作成の最終段階に西側だけ埋めた土と思われます。後に灰色、茶色と徐々に覆土し、紫色の土で完全密封したものと考えられます。覆土は粘性があって水の浸み込まない中部ロームの土が使用され、通常使用される粘土は使用されていませんでしたので、地域色とも言えそうです。

次回、向山古墳群 第16号墳 第３回は「前方部と後円部の盛土」について記述します。

企画展「古代伊豆国（いずのくに）－国府と国分寺－」報告

●開催期間　令和４年10月15日(土)～令和５年１月29日(日)
●展示資料数　190点　　**●入場者数**　16,443人

伊豆国の国府が所在した三島市域について、市内の遺跡から見つかった考古資料を中心に紹介しました。

上才塚（かみさいづか）遺跡より出土した腰帯（ようたい）の巡方（じゅんぽう）（ベルトの飾り）や、伊勢堰（いせせぎ）遺跡の墨書土器、箱根田（はこねだ）遺跡の祭祀遺物、国分寺や市ヶ原廃寺の瓦類を紹介したほか、国立歴史民俗博物館所蔵の「伊豆国正税帳（いずのくにしょうぜいちょう）」（正倉院古文書複製）、令和３年度の発掘調査で見つかったばかりの桶田（おけだ）遺跡の土器なども展示しました。市内の方だけでなく、県外からも多くの方が来館され、古代の伊豆国について改めて注目していただけたようです。

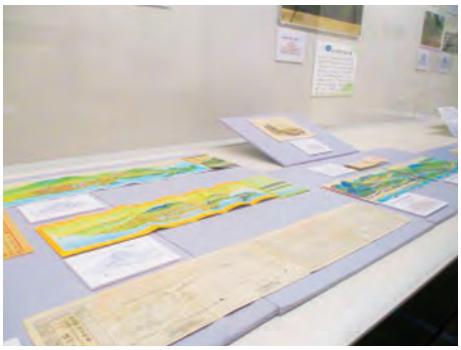
●関連事業

「古代の国の名前　よみかたクイズ」　参加者数　418人

古代の国名の読み方を答えるクイズ用紙を配布し、参加者には郷土資料館オリジナルのみしまるくん・みしまるこちゃんシールを贈呈しました。

富士・沼津・三島3市共同企画展「このへん道中いまむかし　富士・沼津・三島の観光」報告

●開催期間　三島会場　令和４年７月16日(土)～10月２日(日)
富士会場　10/8(土)～11/27(日)　沼津会場　12/10(土)～1/29(日)
●展示資料数　134点　　**●入場者数**　三島会場　10,791人(３会場合計16,471人)
●主　　催　富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会



当館が参加する富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会が共同で実施する企画展として、本年度は３市の旅と観光の歴史を紹介する巡回展を行いました。３市域は、江戸時代には東海道の宿場町として多くの旅人が訪れ、明治時代以降には、鉄道の敷設など交通が発達したことで東京から手近な距離の観光地となりました。本展では、近世・近代・戦後の３つの時代で展示構成を分け、観光パンフレットや土産物といった民俗資料を中心に、浮世絵なども使って各時代の観光の様子を紹介しました。

夏休み期間中ということもあり、市内の方だけでなく、県外からも多くの方が来館され「時代の移り変わりを感じる事が目で見て実感できて、楽しめました」等といった好意的な意見をいただきました。

●関連事業

「よりみちクイズ」　参加者数　300人

展示内容に関するクイズを実施し、参加者には企画展オリジナルクリアフォルダーを贈呈しました。特に景品のクリアフォルダーは好評で３市すべての会場で予想を超える皆様にご参加いただきました。

ボランティア活動紹介

郷土資料館では、現在、古文書や石造物のような文化財の整理・調査、昔のあそびや暮らしぶりなどをつたえる体験講座（郷土教室）の運営をボランティアの方々と協働で進めています。ボランティアはそれぞれグループに分かれて活動しており、今回は石造物調査グループと古文書整理グループの活動についてご紹介します。

石造物調査グループ

●実 施 日　毎月第２木曜日

石造物調査グループでは、ボランティア会員が月１回の頻度で集まり、三島市中郷地域（旧中郷村）のフィールドワークを行っています。平成28年度からはじまり、今年で７年目に入りました。現在、安久・梅名・大場・中島・多呂・北沢の６地区の調査が終了しており、その成果をまとめた報告書『三島の石造物』１～３を発行しています。令和４年度は長伏・御園・松本地区の調査に着手しました。

まず、地区全体を歩いて地区内に存在する石造物を把握し、次に､石造物１基ごとに詳細な調査と写真撮影を行っています｡また、石造物そのものの調査と並行して、お寺や地区の方からお話を聞いたり、地区誌（『中島区誌』など）を読み合わせたりして石造物に関する情報収集を行いました。加えて、地質の専門家である増島淳氏（静岡県地学会東部支部長）に協力を仰ぎ、石材の石質調査も行っています。

古文書調査グループ

●実 施 日　毎月第２水曜日

古文書整理グループでは、ボランティア会員が月１回の頻度で集まり、古文書の整理作業を行っています。この活動は石造物調査の会と同時期に始まりました。ボランティア会員は、NPO法人伊豆学研究会橋本敬之理事長より、古文書資料の取扱いやクリーニングの方法、整理封筒の作成の仕方について学びながら作業を進めています。

現在は、古文書を整理用の封筒から取り出して、封筒オモテ面に詳しい情報―古文書のタイトル、要旨、成立年月日、差出、受取、形態、数量、その他特記事項―を記入するという作業を中心に行っています。会員の中にはくずし字の入門講座や解読サークル（三島古文書読習会や三島宿研究会など）に参加しているという方もいらっしゃいますが、“この会の活動で初めて古文書に触れた”という方も多く、当初はくずし字や旧字、異体字の解読に苦戦しました。しかし年数を重ねるにつれて読める字も増え、その活動の成果の一部は企画展での紹介や「的場 贄川家文書仮目録」（令和３年度末までに１～４を発行）という形で結実しています。

郷土教室の報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。令和４年10月から令和５年２月までに行った事業をご紹介します。

日　程	郷土教室	内　容	参加者
10月１日（土）	江戸時代の三島宿	くずし字クイズ、三島宿の展示ガイド	32人
11月５日（土）	昔のくらし	回想法	93人
	楽寿園の自然	ドングリゴマ・ネックレス作り、 葉っぱの拓本カード作り	55人
12月３日（土）	ワラ細工	正月かざり作り	90人
１月14日（土）	リリアン編み	干支のウサギの編みぐるみ作り	8組 （14人）
２月４日（土）	楽寿園の自然	富士山の溶岩観察、楽寿園溶岩ツアー、環境カルタ	61人

そよかぜ学習の報告

●学　習　内　容　**体験学習　昔の道具の体験**
館内見学　２階常設展示室の解説

●受け入れ学校数　**市内12校　市外１校**

本年度も市内・周辺市町の小学３年生の課外授業「そよかぜ学習」の受け入れを実施しました。１階多目的室では石臼・製麺機を実際に動かしてもらい、２階常設展示室では昔の職人（大工・傘職人・紺屋など）についての解説や、農家にあがって囲炉裏の役割や自在鉤・箱膳の使い方についての解説を聞いてもらいました。絵や写真でしか目にしたことのない製麺機や石臼を実際に動かしてみるとその重さなどに驚いていました。

寄贈資料の紹介

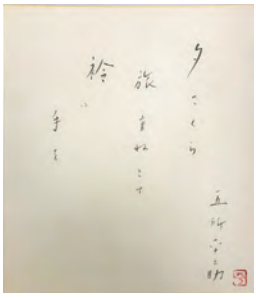
令和４年10月から同年１月までに、次の方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます。

●寄贈資料

寄 贈 者	資　料　名	点 数
足立まり子氏	「三島旭新聞」昭和5年6月20日～22日	3点
蛭海志津子氏	五所平之助氏直筆俳句色紙、市内在住作家たちによる絵画色紙	13点

●五所平之助　俳句色紙

日本を代表する映画監督の一人である五所平之助（明治35～昭和56年）は、晩年を三島市で暮らし、「わが町三島―1977年の証言―」を監督するなど、三島市と縁の深い人物です。今回寄贈されたのは俳人としても知られていた氏の俳句色紙で、包紙及び色紙ともに本人の直筆です。「夕さくら　春」と題された色紙（写真右）のほか合計7点寄贈されました。



刊行図書のご案内

「三島市郷土資料館研究報告」14　令和４年７月29日刊行　（頒布価格700円）

毎年恒例の研究報告もおかげ様で14号を数えるまでになりました。今年は近代の三島の歴史に加え、箱根山麓の狩猟に関する聞き取り調査記録や三島市域から出土した縄文土器の産地についての考察が掲載されています。地域の歴史・文化・自然を深く知るための一冊です。

【内　容】

明治初期における地方の殖産興業―伊豆地域を事例として―	桜井祥行
明治時代以降の樋口本陣についての覚書	笹山曜子
箱根山西麓の狩猟に関する聞き取り調査記録―昭和30年代後半以降の状況―	柿島綾子
「ジオツアー三島宿」の成果（10）―三島市域から出土した縄文土器の産地―	増島　淳

「古代伊豆国―国府と国分寺―」　令和４年10月15日刊行　（頒布価格500円）

令和４年度の企画展「古代伊豆国―国府と国分寺―」の図録で、律令制下における三島の様子について、国府や国分寺に関連する遺跡から見つかった資料を中心に紹介しています。

「三島宿関係史料集」12　令和５年３月31日刊行予定　（頒布価格600円）

当館が所蔵する「三島問屋場・町役場文書」中の「支配・治安」に分類した史料から、天和～寛延年間（1681～1750）の７点を翻刻したものです。地域史研究にお役立てください。

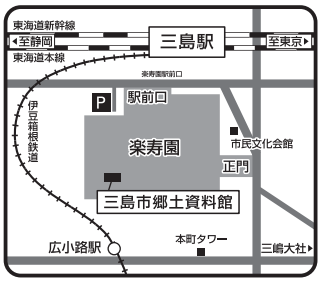
郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228　FAX 055-971-6045

開館時間　午前９時～午後４時30分（11月～３月）
　　午前９時～午後５時（４月～10月）

休 館 日　毎週月曜日（祝日のときは翌平日）、年末年始

入 館 料　無料（ただし楽寿園入園料として別途300円かかります。15歳未満は無料、学生は学生証提示にて無料。）



三島駅（南口）から徒歩５分。

郷土資料館だより

Vol.45　No.3（第134号）
発行日　令和5年3月15日（年3回発行）
編　集　三島市郷土資料館
発　行　三島市教育委員会
E-mail：kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp
URL：https://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/